

(1) 平成27年度青木小学校全校研究テーマ

友とかかわりながら、自ら考え学びをつなげる子ども（5年次）

本校の児童は真面目で、言われたことはきちんとやろうとする子が多い。全国学力テスト、CRTの結果から、確かな学力の定着も図られていることも読み取れる。しかし、自分の考えをもつことはできるものの、話し方がわからなかったり、自信がなくて発言できなかったりする子の姿も見られる。そのため、友の話を聞き、自分の考えを深めたり集団の考えを発展させていこうとしたりすることが弱いと思われる。

昨年の研究は、総合生活、インクルーシブ、ICT活用の3つの部会に分かれて、研究を進めていった。それぞれの部会で、「地域素材を発掘し、継続的に学ぶことができる題材を見つけることができた」「教師が子どもとともに学ぶことで、活動や気持ちを共有することができた」「視覚支援を取り入れることで、聞き逃しやすい子も授業に積極的に参加できる」「授業をシンプルに視覚化することで、課題に取り組みやすくなり、どの子にもわかる授業になっていく」「ICTを使った教材により、学びやすくなり、友の考えを共有することもできた」などの成果が得られた。

しかし、それぞれの部会での成果や課題、学びのあり方を全職員で共有することが十分できなかった。また、聞き合う活動や深まりのある活動が十分保証できなかったり、教師と子どもの一問一答の学び方になってしまったりしている傾向もみられる。それは、教師の指示が多いことや、子どもたち全員が自分の考えをもつことが不十分なまま授業が進んでしまっていることに原因があるのではないかと考えられる。

そこで今年度は、子どもたちが自分の考えをもち、友とのかかわりの中で考えを広げたり深めたりして追究できるようになるために、まず、ねらいを焦点化し、子どもが学びたくなるような「しかけ」を設定して授業を構成したい。また、今までの研究から明らかになってきた「学びあい」を、観点を明確にして効果的に位置づけ、考えを練り上げていくようにしたい。このような実践の積み重ねを通して、子どもたちは友と『かかわり』ながら、自ら考え『学び』をつなげていくようになると考え、本テーマを設定した。

○「友と『かかわり』ながら」とは

…「思いを発表し合う」「思いを聞き合う」「思いに反応し合う」「思いに共感し合う」

○「自ら考え『学び』をつなげる」とは

…「自分と友達の意見の共通点や相違点に着目する」「自分の思いを分かりやすく表出する・折り合いをつけて表出する・相手の立場にそくして表出する」「自分の考えを広げたり深めたりする」

(2) 本年度の重点課題<友と『かかわり』ながら学ぶ意欲の育成 自ら考え『学び』をつなげたい授業づくり>

<1時間の授業の充実を図る>

- ① 学習の姿勢・構えづくりを徹底する。
- ② 基礎基本が何かを明らかにし、その定着を図る。
- ③ 「授業をよくする三観点（「ねらい」「めりはり」「みとどけ）」の日常化
- ④ 授業形態の工夫を図る（ペアやグループでの学習、少人数や習熟度別、TT指導、学年内教科担任制、学年合同授業など）。
- ⑤ 学力・学習状況調査（6年）、CRT（全学年2学期）、P調査・C調査（4～5年）、学

校自己評価のデータから、学級・学年の児童の学力や学び方の実態や傾向、課題を詳しく把握し、日々の授業に具体的に生かしていく。

- ⑥ ねらい・見通し・向上の実感がもてる「ドリル」「朝読書」「家庭学習（「家庭学習のてびき」を活用）」の充実・改善を図る。

<授業の子どもの具体的な姿（変容・つまずき・成長など）を通して互いに学び合う>

- ① 重点研究部会の授業づくり、授業研究を通しての学び合い
- ② 研究会や学年を中心にした授業提供、一人一公開授業、職員研修などにより、教職員が互いに学び合い、自己の課題をつかみ、授業力を高める。
- ③ 授業を通して、子どもを知り合い、語り、子どもの良さを伸ばす。

（３）研究体制（指導研究推進 ◎藤原 久保田）

- ① 学びあい・ICT活用 ○久保田、宮下(恵)、大井、森、小木曾、櫻井(睦)、櫻井(啓)
- ② インクルーシブ部会 ○藤原、下島、宮下ゆ、山本、宮島、池田、西川
- ③ 評価研究推進 ○森、久保田、藤原

（４）各部会の研究の見通し

【指導研究推進部】	
<ul style="list-style-type: none"> ・ 全体研究の計画、推進 ・ 全校研究授業の取りまとめ ・ 指導主事(指導者)申請 ・ 研究情報発行 ・ 他校の公開授業のお知らせ 	
【学び合い・ICT活用】	インクルーシブ
<ul style="list-style-type: none"> ・ 1時間の「学び合い」のモデル作り (H23版・H24版・H25版を参考に) ・ 授業における実践 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 対象児の児童理解におけるケース研究と、教育課程の作成・見直し ・ 授業における授業実践 ・ だれもが安心して授業ができる教室環境づくりの提案

（５）重点研究推進日程

月日	主な内容
4 / 2 (木)	重点研究（全体会） 一年間の方向 8：30～9：00
4 / 3 (金)	重点研究（部会） 一年間の方向 8：30～9：00
4 / 14 (火)	重点①
4 / 22 (水)	重点②
5 / 8 (金)	重点③
5 / 20 (水)	重点④
5 / 31 (日)	重点⑤
6 / 10 (水)	重点⑥
6 / 19 (金)	重点⑦
7 / 15 (水)	重点⑧
7 / 27 (月)	重点⑨ 青木小の子どもについて語る会Ⅰ（一学期の反省と二学期の重点）
8 / 17 (月)	重点⑩

8 / 26 (水)	重点⑪
9 / 2 (水)	★H27教育課程研究協議会 (他校へ参加)
9 / 16 (水)	重点⑫ 教育課程研究協議会参加報告会
9 / 30 (水)	重点⑬
10 / 5 (月)	★視察研修 (計画休業)
10 / 7 (水)	重点⑭ 視察研修のまとめ (仮)
10 / 19 (月)	重点⑮
11 / 6 (金)	重点⑯
11 / 16 (月)	重点⑰
12 / 2 (水)	重点⑱ 青木小の子どもについて語る会Ⅱ (二学期の反省と三学期の重点)
2 / 3 (水)	重点⑲ 部会のまとめ (ふりかえり)
2 / 24 (水)	重点⑳ 重点研究まとめの会 (発表会)
3月下旬	H27研究紀要製本

(6) 「一人一公開授業」

自己課題を設定し、それに基づく実践を本校職員に公開することを通して、指導力を高めていくための機会とし、指導主事・専門主事に指導をいただく。

(7) 高濱正伸先生の授業の統括と花まるドリルへの取り組みの統括

- ・9年間の成果と課題をもとに、全学年による高濱氏と連携した授業作りの推進
※今年度は朝ドリルへの応用・発展を実施していきたい。
- ・懇談会形式の会合を年2回(5/29・2/5)実施。その後懇親会を実施する。
- ・アンケート実施への協力
- ・漢字検定の継続(毎学期末に行う。今年度は7/17、12/18、2/5)
- ・今年度の予定(月一回金曜日に予定している。)
- ・花まるドリル

毎日清掃終了後1:50～1:55に実施する。

低学年はペーパー・高学年はタブレットパソコンにより行う。



参 考 1

高濱 正伸 先生 (花まる学習会代表)

平成18年より本校に月1回の割合で来校し、青木小児童の思考力の育成にご尽力くださっている。

—略歴—

昭和34年、熊本県生まれ。東京大学・同大学院修士課程卒業。学生時代から予備校等で受験生を指導する中で、学力の伸び悩み・人間関係での挫折と引きこもり傾向などの諸問題が、幼児期・児童期の環境と体験に基づいていると確信。1993年2月、小学校低学年向けの「作文」「読書」「思考力」「野外体験」を重視した学習教室「花まる学習会」を、同期の大学院生等と設立。算数オリンピック問題作成委員・決勝大会総合解説員を務め、スカパーフェクトTVの中学生の数学講座講師も務めた。また、埼玉県内の医師やカウンセラーなどから組織された、ボランティア組織の一員として、いじめ・不登校・家庭内暴力等の実践的問題解決の最前線でケースに取り組んでいる。—『小3までに育てたい 算数脳』(健康ジャーナル社、2005年)著者紹介より—

1時間の「学び合い」のデザイン

はじめ

① 課題設定に時間をかけない。

(今日のゴールが分かる。)

- 素早い課題設定。• 活動の時間を十分にとる。

② 学び合いの「タネ」をまく

(「〇〇したい」気持ちが生まれる『しかけ』)

- 子どもの中に「〇〇したい」気持ちを生み出す。

なか

③ 「学び合い」の前は目的を持って

(「話したい」「困った」ときに、

- 何のために(発表練習、情報交換、話し合い)
- いつ?(ア計画的 イ必要感に根差して)
- ペアか、グループか(3人、4人、5人)
- 様子を机間指導でみとり、全体追究にいかす。



④ 全体での「学び合い」

(交流する中で、自分の考えを捉えなおしていく)

- 話しあう内容を絞りきる。
- 子どもの言葉を「待つ」「聴く」、子どもたちを「つなぐ」、学びを深める「問

おわり

⑤ 一人に還る

(学びを自覚し、自分と友の姿を振り返る)

- 学習問題について振り返る。(最初の自分と比べて)
- 自分の学び方を振り返る。
- 友の学び方を振り返る。

